

序

画像診断別冊KEY BOOKシリーズの胸部編として、1996年に『すぐ身につく胸部CT』の初版が上梓され、その6年後に新版が発刊された。それから約17年の年月が過ぎたが、その間の画像診断の進歩には目覚ましいものがある。胸部画像診断法の第一選択は胸部単純X線撮影であるが、診断技術の進歩と普及によって、CTが胸部領域における画像診断の中心的役割を担っている。薄層CTにおける二次小葉に注目した読影法はすでに確立されており、マクロ病理像に近い診断が可能である。高画質のMPR画像やMIP画像は、病変の詳細を3次的に容易にとらえることができる。最近では超高精細CTも出現し、微細な構造物に対する診断能の向上が報告されている。一方、MRIは優れた組織識別能を有しており、特に縦隔・胸壁病変の診断においてはきわめて有用である。このような状況において、CTだけでなく他のモダリティを含めた胸部画像診断の編著を依頼された。既刊の編著者である酒井文和先生にご相談したところ、快くお許しいただいた。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

本書では、1～10章で肺病変を中心にカテゴリー別に、11、12章で縦隔と胸膜・胸壁病変に分けて記載した。commonな疾患の胸部単純X線正面像とCT横断像を基本としたが、可能な限りMPR画像や3D画像も使用し、稀だが臨床的に重要な疾患も一部取り上げた。また、特に縦隔と胸膜・胸壁病変においては、MRIやPET/CTの画像を多く掲載するように心がけた。

本書の特徴として、各疾患の1例目とは異なる画像を呈する症例を「バリエーション」として、また、類似の画像を呈する別の疾患を「参考症例」として提示したことが挙げられる。さらに、疾患概念や鑑別診断のポイントにも触れており、知識の整理に利用していただければ幸いである。胸部の画像診断においては、発熱の有無ひとつをとっても、臨床情報が重要であることはいうまでもない。巻末に、臨床症状に基づくカテゴリー別の鑑別診断を表にまとめてみたので、参考にしていただきたい。本書は、初学者からベテランの医師まで幅広い層を対象とした臨床実務書であり、皆様のお役に立てることを願っている。

日常臨床で多忙な中、執筆を快く引き受けていただいた同門の先生方、また、貴重な症例を提供いただいた関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。最後に、企画から何とか2年で本書を出版する運びとなりましたが、その間、きめ細かに私をサポートいただいた編集部に深謝いたします。

2019年9月

芦澤 和人